

伊藤 内藤さんの『自然主義の人権論』は本人も著書で指摘されているように、進化生物学の見地を日本の法学や哲学に導入するという点で日本では先駆的な業績で、倫理学でもしばしば道德の動機づけの要素として用いられる「欲求 (desire)」の概念を進化生物学に依拠した人間の本性や本能である「繁殖」として捉えることで、個人だけでなく血縁関係や繁殖資源を提供する集団に互惠性が生じる仕組みをうまく説明できるというメリットを持っているのではないかと私は読みました。

進化生物学の見地を道徳理論に応用しようとする試み、もしくは自然主義の道徳理論というのは特にアメリカでは盛んで、また野家啓一さんという哲学者がいらっしゃるのですが、「科学と哲学は本来対立するべきものではなく、科学・哲学が棲み分けた上で交易を盛んにするという道もあるだろう」というように科学と哲学同士の相互交流自体そのものは学問的にとても有意義なものであるということに私も内藤さんも同意する。

ただし、内藤さんの議論が前提とする幾つかの事項に対して懐疑的にならざるを得ず、内藤さんの進化生物学的な道德・人権の説明が、ある部分では説得力があるものの、ある部分では説得力が薄いように感じます。以下において、内藤さんのキータームである繁殖概念に特にスポットを当てて内藤さんの議論に説得力の弱さを感じている部分を論じようと思います。

大きく分けて僕の主張というのは二つでして、内藤さんの話が、道德や人権の動機づけの問題と、道德や人権の正当化の問題を混同しているのではないかという主張が一つと、内藤さんによると、人間の合理性とか言語というのはそもそも人間の本能に附属するサブシステムだと主張するのですが、それがもう本能や本性から独立して自律性を持ち始めているのではないかというのが僕の内藤さんの本を読んだ二つの疑問点です。

まず1点目から説明しますけれども、道德の動機づけの問題と道德判断の正当化の問題の区別は英米圏のメタ倫理学ではしばしば問題となり、Thomas Nagel や Michael Smith などの論者は特にこの問題を重要視します。私たちはある道德が正しいということを知りつつ、正しいとされる道德に従いたくないということが日常生活ではしばしば起こり得ると思います。

もちろん道德の正当化がそのまま動機づけにつながると主張する倫理学の立場が幾つか存在し、例としては有徳な人は道德判断に対して正当な理由づけを行えば、その人の道德の動機づけになる。正当な理由づけに従ってその人が道德的な行動を行うという立場があると。この主張をメタ倫理学では「内在主義」と呼んでいます。その反対の立場として道德の正当化が道德の動機づけとしてそのままつながらないという主張があり、この立場を「外在主義」と呼んでいる。内藤さんの議論の場合、ここは後で詳しく論じますが、その主張は基本的に「外在主義」であり、正当化と動機づけの問題は別の問題として区別して論じなければいけないのではないかというのが僕の主張です。

この区別の問題は、道德を生物進化のアナロジーに依拠する道徳理論にしばしば批判が向けられる。生物進化のスピードと文化／文明が変化するスピードが違い過ぎるというタ

イムスケールの問題とも恐らく関連性がある。これは青木先生も以前批判されていたかと思えます。

内藤さんの議論は特に道德や人権の動機づけの問題に重きが置かれているため、人権の普遍性の論争は常に過去や歴史的な、より繁殖資源の獲得から離れた人権であると思われる。これは先ほど古茂田先生もおっしゃられていたかと思えます。社会権が自由権よりも後に考えられたものにもかかわらず、自由権よりも急速に広まったのはなぜかという問題や、より繁殖資源の獲得から離れた新しい権利、例えば同性愛者の権利、障害者の権利、動物の権利、さらなる人類の未来においてはロボットの権利など生まれるかもしれないが、それをどう説明するのかという問題を生み出すように思われる。

まず1点目、内藤さんの繁殖概念を人権や道德の動機づけの問題と考えた場合、かなり説得力と妥当性があるのではないかというのが私の意見です。これもさきに述べたように、過去の人権概念の形成の過程に関する論証には説得力があるように思われる。ただしこれは道德の動機づけに関するヒューム主義と言われる立場なのではないかというのが私の解釈です。

ヒューム主義についてはわかりにくいと思ったので脚注に解説を入れたのですが、メタ倫理学における動機づけ問題において、行為主体が世界を認識するがゆえに真偽が問える信念と行為主体が世界を変えようとするがゆえに真偽が問えない欲求との心的状態の組み合わせが道德の動機づけを生むという理論があり、それをヒューム主義と呼んでいます。これが本当のヒュームの解釈なのかというのは議論があるようですが、現在のメタ倫理学ではヒューム主義と呼ばれています。

内藤さんの議論においては繁殖の概念がヒューム主義の欲求 (desire) に相当し、繁殖資源獲得のための合理性が信念 (belief) に相当するのではないかと考える。これは私の解釈です。ヒューム主義は英米の倫理学ではかなり有力な立場であるが、もし内藤さんが動機づけに関するヒューム主義をとるのであれば、幾つか動機づけに関する反ヒューム主義という立場が存在して、これは Thomas Nagel や John McDowell の立場と言われていますが、これを検討しなければいけないのではないかというのが1点目です。

2点目が、これからが割合重要な問題だと思いますが、内藤さんの繁殖概念は道德判断の正当化の問題と考えた場合、内藤さんの理論にはやや無理があるのではないかというのが私の意見です。道德判断の正当化の場合、未知の新しい道德や人権にしばしば道德の判断の正当性の説明をしなければいけない。繁殖概念だけでは正当化の問題は困難なのではないか。

道德判断の正当性の問題は換言するならば道德判断の真偽や善悪を問うということである。動機づけにおけるヒューム主義をとった場合、人間の欲求そのものは真偽や善悪が問えないため、真偽が問える信念のみが道德判断の正当性を判定する際に機能すると考えられる。つまり道德の正当化に欲求 (desire) が介在する余地がない。そのため、自然主義かつヒューム主義の論者はしばしば動機づけの問題と正当化のギャップの問題に悩むこと

が多いと指摘される。これは僕の意見というよりは、メタ倫理学全般の指摘です。

またメタ倫理学で内藤さんのような自然主義の立場をとる論者の場合、多くの場合、人権のような権利規定的な道徳ではなく、規範倫理上では功利主義の立場をとることが僕の見方では多いのではないかと。例えば内藤さんが主張するように人間の本性や生得的な性質である「繁殖資源の最大化」や「快」を功利主義の「功利性」や「厚生」と同一視すれば、道徳の動機づけの問題はそのまま道徳の正当化の問題に結びつけることが比較的容易なのではないか。

しかし内藤さんが目指すのは自然主義による功利主義の正当化ではなく、あくまでも人権の自然主義による正当化で、さらに困難な問題なのではないか。これは恐らく道徳や権利の正当化の問題が未知の問題や新しく提唱される権利や道徳観念をどのような基準でその妥当性を判定するのかという問題と深くかかわっているのではないか。

内藤さんは繁殖資源の配分の問題による論証で第6章で特にこの問題に挑戦しているが、現在人々の間で対立しているような権利の問題はさきにも述べましたが、「繁殖」を行わない「同性愛者の権利」、「繁殖資源」を提供しない「障害者の権利」、そもそも人間とは種が異なる「動物の権利」といった新しい権利は繁殖資源の権利がどんどんかけ離れており、内藤さんの理論はそうした問題に判断基準を提供できるのかという疑問があります。

次に第2点で僕の主張に行きます。「言語」や「思考」というのがそもそもサブシステムではないのではないかというのが私の主張で、言語は内藤さんの主張によると人間の本能に附属するサブシステムであると主張する。こうした内藤さんの主張の背景が「生物としての人間」という他の生物と人間との連動性を訴えたいという独自の立場があると思われる。

しかし私見によれば、特に人間特有の言語的コミュニケーションを内藤さんが考えるほどささいな問題ではなく、しばしば言語論的展開と称されるように、特に英米圏の分析哲学者は人間と言語の問題を重要視してきた。言語そのものが人間の思考や感覚のベースである可能性があるのではないかというのが私の意見で、例えば Donald Davidson という哲学者がいますが、その人が「合理的動物」という論文で、言語を持たない動物が思考できないという議論を行っている。Davidson によれば belief (信念) 同士が結びつくことが人間の思考を生むと主張する。さらに信念の概念を生み、また人間の信念同士を結びつけさせるのは Davidson によれば言語である。内藤さんによれば、人間の繁殖の本能が合理性を生むと言うんですが、Davidson によれば人間の言語コミュニケーションそのものが人間の合理性を生むとします。

もう1点指摘したいのは、「言語」と「感覚」も関係があるのではないかというのが僕の意見で、言語なしに思考するというのが想像できないように、言語と思考が深く結びついていることはしばしば指摘されるのですが、人間の感覚と言語が結びついていることはあまり指摘されないことのように思うので、以下のような軽い思考実験を行う。あまりいい思考実験ではなかったかもしれませんが。

例えば日本語の「凝る」という言葉に当たる言葉が存在しない言語が流通する文化に暮らす人々を想像してみる。その言語に暮らす人々においては日本語では「肩が凝る」と表現される感覚をすべて日本語の「肩が痛い」に相当する言葉で表現したとしよう。その場合、その文化に暮らす人々は「肩が凝る」という感覚を認知することができるだろうか。本来人間に生得的であると思われる「感覚」ですら後天的で社会的な「言語」によって分化・区別されて人間に認知されている可能性があるのではないか。

その2点から私が思うのは、そもそも「言語」や「思考」は内藤さんが主張するように人間の本能のサブシステムにすぎになかったんだろうけれども、時間が経過するにつれ、本能とは独立した自律性を持つようになったのではないか。現在も言語や思考はそもそも人間の本能とかかかわっている部分がそれとは独立したメカニズムとして機能している可能性がある。例えば、人間の言語や思考は、ややSF的な設定になるが、人間の世話や下働きをする目的で設計された人工知能付きのロボットがやがて人工知能付きのそのものが自律性を持ち、当初の目的とは相反する行動を行うように、逆に人間を支配し始めるようになる設計システム上のエラーや暴走に似ていると思う。

さきに論じた反ヒューム主義者の「信念」のみによって道德の動機づけが行われ、可能性を認めるのであれば、欲求や人間の本能で初期の段階では道德の動機づけが行われるのであるが、徐々に人間の言語やそれに伴う思考が発達するにつれ、言語や思考そのものが自律性を持ち、人間の欲求や本能を介在しなくても人権や道德の動機づけがなされた可能性があるのではないか。人権はこうした言語や思考という現在の理論枠組みにおける生物学上では捉え切れないエラーによる副産物なのではないかというのが2点目の主張です。時間もないのでこの辺で終わります。